

平成27年8月9日

No 134

〈自利利他〉

戦後70年、戦争に負け空襲で焦土化した何もなかった日本が世界で一番安全な国となり、物にあふれ豊かになりました。先人の人達が懸命に努力し、世界的な企業が多く現れ、日本経済は発展しました。その中で人口も増加し、会社もどんどん増えていきました。我々会計事務所の仕事(税金のこと)も増えました。原点に戻すために創業者飯塚毅先生の言葉「自利に利他あり」を紹介しよう。『大乘仏教の経論には「自利利他」の語が実に頻繁に登場する。解説にも諸説がある。その中で私は「自利とは利他をいう」(最澄伝教大師伝)と解釈するのが最も正しいと信ずる。仏教哲学の精髓は「相即の論理」である。般若心経は「色即是空」と説くが、それは「色」を滅して「空」に至るのではなく、「色そのままだに空」であるという真理を表現している。同様に「自利とは利他をいう」とは、「利他」のまただ中で「自利」を覚知すること、すなわち「自利即利他」の意味である。他の説のごとく「自利と利他」といった並列の関係ではない。そう解すれば自利の「自」は、単に想念としての自己も指すものでないことが分かるだろう。それは己の主体、すなわち主人公である。また、利他の「他」もただ他者の意ではない。己の五体はもちろん、眼耳鼻舌身意の「意」も含む一切の客体をいう。世のため人のため、つまり会計人なら、職員や関与先、社会のために精進努力の生活に徹すること、それがそのまま自利すなわち本当の自分の喜びであり幸福なのだ。そのような心境に立ち至り、かかる本物の人物となって社会と大衆に奉仕することができれば人は心からの生き甲斐を感じるはずである。』

「お客様の喜びが私の喜び」「お客様の幸せが私の幸せ」「お客様の満足が私の満足」と言っています。松下セトヨタもソニーもホンダも支える回りの企業も「利他の心」で日本経済が発展して来たと思います。私達は日本経済の末端にいますが一人ひとりが社員さんやお客様、社会のために努力し、喜んで頂き幸せになり満足して頂く。毎日真意論しちゅうの努力を、未来がひらけていきます。

高林幸裕